

上級朝鮮語リスニング・リーディング―試行錯誤の1年間を振り返って

矢野 百合子

立教大学に週2回だけ顔を出す兼任講師の私には、立教の朝鮮語や言語副専攻の全体を見渡して上級朝鮮語リスニング・リーディング（以下、LR）を評価することはできないので、今年度の池袋キャンパスでの授業内容と、担当するにあたって悩んだいくつかの問題や準備過程と実際の相違、来年度の変更点や今後への期待などを書こうと思う。

授業は毎回 CHORUS 上に出題された dictation 課題の自己チェックから始まる。分量は2分弱だが朝鮮語は結合時の連音変化が多いので、音声を正確に聴き取れても正しく表記することは上級者でも意外に難しい。また複合母音を含めて21ある母音と19の子音の組合せは日本語母語者には耳での区別が難しく、未知の単語であれば何回も聴いて確認する作業が必要になる。授業時間に縛られずに学生が個々のペースで作業できる CHORUS は一般教室での LR 授業には欠かせない存在で shadow 練習にも適している。対訳付きのスク립トで誤りをチェックした後に表現や語彙の解説をしてから読み練習に入る。その後の60分は、前期は政治、経済、社会問題等のニュース解説（1～2分）を聴かせて内容を把握する練習をさせ、こちらも対訳付きのスク립トを用いて解説した後、ペアで sight translation (ST) をおこなった。後期は韓国の大学留学生用教材を使用し、教養科目の講義（5～9分）を聴きながらノートを取っていく練習を続けている。内容は入学式の学長演説に始まり、教育学、心理学、

歴史文化、メディア論、人権論、生命倫理、政治経済等、多岐にわたっている。必死でノートを取り内容を把握していく過程の中で、学生達は自分の意識が「韓国語を学ぶ」ことから「韓国語で学ぶ」こと、つまりコミュニケーション手段として語学力を活用することへと変化しつつあることに気づいているだろうか。学生達は非常に積極的に優秀だ。これほどレベルの高い授業ができるとは予想していなかったので率直に嬉しい反面、本来ならばこのクラスの主対象であったはずの学生達を脱落させてしまった申し訳なさも感じている。

諸言語教育研究室主任（朝鮮語）の石坂浩一先生から上級LRのお話をいただいた時に最初に頭に浮かんだのは二つの疑問符だった。初めてのスキル別クラスを任せていただけることはとても嬉しかったのだが、同時にLとRの組合せだということに「？」がついた。韓国語の教材は「読んで書く」「聴いて話す」というinputとoutputの組合せが多く、リスニング教材は「音声を聴いて問題に解答した後に関連表現を使って会話練習」という形で構成されている。長い間韓国では日本語を、日本では韓国語（朝鮮語）を教えてきたが、このLとRの組合せは初めてだったので授業をどう組み立てるかが即座には思い浮かばなかった。なぜLとRなのかという問いにどういう答えをいただいたかは正確に記憶していない。しかし上級科目の構成からは「読んだり聴いたりはできても書いたり話したりの

コミュニケーションは苦手」という典型的な日本人の英語能力を意識した設定であろうことは推測できた。

もう一つの「？」は上級科目の履修対象が、2年間大学で基礎と中級を学んだ学生（以下、中級修了者）と、個人的に猛勉強したり韓国に留学して戻った学生（以下、ハイレベル）の両方になるだろうという点だった。これは英語に例えるなら高校1年生と大学院生と一緒に学ぶようなもので、はっきり言って両者を満足させる授業は不可能だと思う。基礎的な英文法と語彙しか知らない学生と、日常会話は問題なくこなせる院生の混合クラスを想像してみてもほしい。どちらか一方にレベルを合せれば必然的にもう片方に辛い忍耐を強いることになる。そこで考えられたのが、上級4科目のうち、communicationとspeakingのシラバスを韓国語で書くことでハードルを高くしてハイレベルを誘引し、writingとLRは日本語で書いて中級修了者を惹きつけるという方法で、そのためLRでもspeakingの要素を入れてほしいということだった。実はここで頭の中に三つ目の「？」が掠めたのだが、そういう方針ならばと考えた末に、LRのシラバスでは目標を「聞き取り能力を高めるために多様な語彙や表現の習得を目指す」と曖昧に表現し、授業計画は「比較的易しい内容の音声を聴いて大まかな内容を把握し、対訳資料で語彙や表現を学んだ後、音読やsight translation（部分訳）を積み重ねて語彙や表現を自分のものにしていく」という中級修了者に的をしぼった記述になった。

このシラバスを書くにあたって考えたのは次のようなことである。中級までの授業で短い会話文を中心に学んできた学生にとって、長いリスニングは

最初は無理かもしれない。ただ、実際に韓国に行くことを考えるならばドラマのような短い台詞の往復だけではなく、ある程度まとまった分量を聴く練習をさせたい。列車内の放送や天気予報、ニュースのすべてを聴きとることはできなくても、いくつかのキーワードや慣用表現から大まかな内容を類推できるだけの力をつけさせよう。そのために毎回1～2分程度のリスニングをさせてから対訳付きのスク립トで内容を正確に理解させ、その後は音読とペアのSTで語彙や表現の定着をめざそう。中級修了者にはちょうどいい授業になるだろう。問題はハイレベルが混じった場合で、当時異文化コミュニケーション学部で教えていた留学帰りの女子学生がすでに履修を希望していた。だが1人ならば個人的に時間を取るなどの方法でフォローできる。そこで基本は上記の授業展開として彼女には別途課題を用意する作戦だった。

以上のような計画で臨んだ新学期、教室には9人が座っていた。最初に韓国語で1分間の自己紹介をさせたのだが、この時点で私はシラバスの書き分けがまったく功を奏さなかったことを思い知ることになった。9人のうち、なんとハイレベルが6人（留学経験者4、留学予定2）で、中級修了者は3人だけだったのである。ハイレベル6人は私がシラバスに沿って用意した比較的簡単なリスニング素材や対訳スク립トのSTを難なくこなして不満顔、念のためにと録音していったニュース解説（約2分）の大意も理解し、時事用語や表現学習とSTをやって初めて「難しい」と感じたようで表情に満足感が現れた。反対に中級修了者3人は最初のリスニングですでおぼつかなくなり、授業の後半は完全に沈黙してしまった。

翌週までに何かよい方法を考えようと
言っただけで初回を終えたが、雰囲気
に委縮してついていけないと感じた
のだろう。中級修了者は3人とも
すぐに授業にななくなり、私は文字
通り「上級」になってしまったクラ
スに合せて当初の素材を dictation
に回し、教室では学生達の苦手な
時事関連素材を中心に方向転換し
て前期を終了した。後期には2人
が他の授業の関係で抜けたが、残
った4人にレベルを下げて授業する
わけにもいかず、後期から新たに
履修登録した5人の中級修了者も
初回で姿を消すことになった。

シラバスは朝鮮語上級の中でも比較
的簡単な内容だったにもかかわらず
LRにハイレベルの学生が集中した
のはなぜか。前述した3番目の「?」
はこの問いと関連している。つまり
朝鮮語で日常会話をこなせるレベ
ルの学生はどの能力を高めたいと
思っているかである。朝鮮語学習
者のほとんどは大学で初めて朝鮮
語に触れるが、そこで強い関心も
った者は週2回の必修だけでは満
足せずに積極的に学習を深めてい
く。昨今の韓流ブームでネットに
も巷にも韓国の歌やドラマが溢れ
、周辺には韓国人留学生も多い。
地理的にも近いし渡航費も安い
ので旅行も簡単にできる。彼らは
積極的に話そうとし、友人を作り
、スマートホンのハンゲルサイトで
交流する。中高6年間のinput中
心授業でoutputに相対的な苦手
意識が形成される英語とは違い
、大学生の朝鮮語初修者には学
習初期からinputとoutputを同
時に学べる環境があり、その気さ
えあれば実践できる行動力と自由
がある。その気になって貪欲に4
技能を学んできたハイレベルの学
習者が最も難しいと感じるのは、
既知の語彙や表現、辞書や翻訳
サイトを利用すれば何とかなる
(と誤解している)outputではな
く、

未知の語彙や表現に遭遇するinput
、自分の耳だけが頼りのリスニング
ではないだろうか。特に留学帰りの
学生は未知の内容を聴き取れなかつ
た悔しさを経験的に知っている。
だからこそ彼らは dictation 課題
のチェックで一喜一憂する。いくつ
かの上級科目を並行履修した学生
は「他の授業は易し過ぎてつまら
ない。この授業は難しいから好き
」と目を輝かす。誤解のないよう
に解説すれば、他の授業には中級
修了者が多かったということだ。
朝鮮語は好きだが彼らほどの行
動力は発揮できずに地道にinput
を続けてきた中級修了者達が
outputの機会を求めて communication
や speaking、writingに集ま
ったために、教員達は授業レベ
ルを中級修了者にあわせたとい
うことだろう。シラバスの内容
を見て履修した学生には申し訳
ないが、上級科目では履修者の
レベルにあわせて授業内容を変
えざるをえない。語学科目を通
年で履修する学生が多いことを
考えると、前期履修者のレベル
に合せて後期のシラバスを訂正
できるシステムがあってもいい
のではないかと思う。

以上のような経験を踏まえ、来
年度の前期シラバスには「まと
まった量を聴き大意を理解する」、
後期は「韓国語での講義にそ
なえる」という副題をつけ、内
容も今季の実際にあわせて難
くした。当初の方針からは外れ
ることになるが、校費、個人を
問わず韓国留学希望者が増え
ている以上、今後も彼らはLR
に登録してくるだろう。逆に
中級修了者が多数を占めるよう
なら授業目標を下げればよい。
比較的簡単だと思っただけが
実際には難しすぎて脱落する
学生が出るよりは、ハイレベル
の少数者を個人的にフォローし
たほうが精神的負担も軽くなる
。半々だったら…そうならな
ないように神に祈ろう！

最後に兼任という気楽な立場で言わせていただければ、立教だけではなく日本の大学は留学帰りの学生達のケアを疎かにしている気がする。本来ならば中級修了者用とは別のハイレベルクラスがあっていい。せっかく留学しても帰国後にレベルに合った科目がなければ高い語学力を維持することは難しい。各言語で留学帰国者用の講座を設けることは難しいかもしれないが、語学教育の充実には底辺の底上げと同時にピラミッドの頂点を高めていくことも大切だ。語学を将来の仕事に活かしたいという学生も増えている。ビジネス韓国語やビジネス翻訳、STを主とする通訳入門的な講座があってもいい。学内の韓国人教員が専門分野を韓国語で講義したり韓国企業を招いて交流する機会が月に一度でもあれば、学生達の視野は広がりモチベーションはより高くなって就職にもつながるかもしれない。

私のもうひとつの仕事である会議通訳の世界でひしひしと感じるのはグローバル化の中で語学力の重要性がより高まっていることだ。ビジネスの場で対等に渡り合うためには相手の文化的背景や状況への深い理解と広い視野、コミュニケーション手段として有効な高い語学力が必要だ。教員としての私はそれを可能にする語学教育の方向性が問われていると感じている。近い将来に立教の言語副専攻システムがこのような能力をもった学生達を輩出して「英語の立教」から「語学の立教」へと発展していくことを期待している。

やの ゆりこ
(本学兼任講師)